

Vol.60

No.

03

Text ▶ 稲葉俊郎

Title ▶ 唇と愛

写真=稲葉俊郎

赤ちゃんは日々成長しています。我が家の赤ちゃんは母乳をなかなか飲めず、妻は悩んでいました。そういう時には、ほ乳瓶でミルクを与えるわけですが、そうした光景を見ていると、よくも人類はこうして一度も途切れることなくつながり、生き残ってきたものだと思います。赤ちゃんがお乳を飲むという行為は、誰に教わるわけでもなく本能的に行っていますが、生命の存続につながる切実な問題です。お乳をくわえ、吸いつき、吸い込み、飲み込む、という一連の動作は、思っている以上にかなり複雑です。そして、生きる根源を支えている極めて重要な動作でもあります。

背骨を持つ動物を脊椎動物と呼びますが、その中に魚類、両生類、は虫類、鳥類、ほ乳類があります。ヒトは「ほ乳類」の一員であることからわかる通り、「ほ乳」という行為はわれわれにとってかなり重要なのです。人間の口には、さまざまな役割がありますが、息をし、話し、笑い、泣き、叫び、口の中での消化、などの行為以外にも、お乳を吸い、噛みつくという役割もあります。大人になると「吸いつき」、「噛みつき」動作の必要性は減りますが、動物に近かった時代には、生きるためにきわめて重要な動作だったことでしょう。赤ちゃんの原始的な「噛みつく」動作のため、女性の大事な乳房は傷つき、時には出血することさえあります。ただ、そうして傷を負っても優しく赤ちゃんに授乳する姿には、女性の偉大さや慈愛を見ます。

ところで、「ほ乳類」の中でも、「唇」を持つのは、実は人類だけなのです。サルでもチンパンジーでもゴリラでも、よく見ると「唇」は持っていません。「唇」は特別な場所です。人類に特有の唇は、皮膚（外胚葉）からできるのではなくて、内臓（内胚葉）の一部としてできます。つまり、口の

中の粘膜（それは胃や腸からお尻までつながっています）が、表面にめくれ上がって厚ぼったくなったのが、唇という場所なのです。だから、唇は肌色ではなくて、内臓のように赤い不思議な色をしているのです。改めてまじまじと自分の顔を見て下さい。唇という場所だけが持つ特殊な素材感や色感の特殊さに、改めて気づくことでしょう。

人類が唇を持ったことで、母親の乳房に食らいつき、空気の漏れがない吸いつきができるようになりました。唇で乳房をくわえ、舌をピストン運動のように動かし、口の中に陰圧を作り、生命線であるお乳を吸い出すことができます。そのため、口のまわりには口輪筋や頬筋が存在し、吸いつく動作のサポートをしています。

唇は、生き延びるためにそうして進化してでき上がってきたのです。ストローで飲み物が飲めるのも同じ働きです。この吸いつく動作を改めて意識してみると、首の背側の筋肉が連動して動くのを感じませんか。おそらく、こうした「吸いつく」動作の果てしない繰り返しの中で、赤ちゃんは「首がすわる」ようになるのだと思います。周りの人を見てみて下さい。みんな当たり前のように首がすわっています。だからこそ椅子に座り、立ち、歩けるのです。首がすわっているだけで、実はすごいことなのです。

試して自分の首がすわっていない、と仮定してみてください。成人では頭の重さが5kg！あり（頭蓋骨だけで1kg弱です）、ボーリングボールくらいの重さを、何の意識もせず常に支え続けているのです。頭を下で支える背骨には二つのカーブがあります。これは3億年前の爬虫類時代と、700万年前の人類発生の時期に獲得した二つのカーブです。緩やかに二つの曲線があることで、頭を持ち上げて直立二足歩行ができるのです。二つのカーブを持った30階建ての背骨の上に、大人は5kgの頭が乗り、「首がすわって」生活しているだけで、かなり奇跡的ですよ！ことごとくおわりになるでしょうか。無意識は、すごい芸当をこともなげに実現してくれるのです。首がすわっていない赤ちゃんの首を支えていると、人間は誰もがこの道を通ったのだなあと、改めて感慨にふけります。

「ほ乳」という行為が、「首がすわる」こととも連動し、普段の動作を支えています。「ほ乳」するために進化した唇は人類しか持たない特別な場所ですが、唇は、生後生き延びるため、お乳を吸うために誕生しました。しかも、それはノドから手が出るように内臓をめぐり上げてまで作り上げたのです。

人々は、愛を確かめ合う時に唇と唇とを合わせた「口づけ」をしますが、こうした行為にも唇は重要な役割を持ちます。なぜ人は愛する人と唇を合わせるのでしょうか。唇と愛とは、生きる営みにおいて連動しているものなのでしょう。

赤ちゃんという存在は、口、唇、食、愛、生きる…というシンプルさに潜む根源的な意味を、全身全霊で言葉を超えて存在だけで伝えるメッセージャーなのでしょう。学びは、あらゆる場面に存在しているのです。



このかわいい唇には生きる力がすべて備わっている

Profile



稲葉俊郎

いなばとしろう。医師。東京大学医学部付属病院循環器内科助教。東京大学医学部山岳部の監督、涸沢診療所の所長（夏季限定山岳診療所）も兼任。さまざまな伝統医療、補完代替医療、民間医療への造形も深い